

# 槐

かい

岡井省二創刊

平成18年1月号

平成十八年一月一日発行 第十六巻第一号 通巻第一七五号（毎月一日発行）  
平成三年九月十八日第三種郵便物認可



# 火恋し

高橋将夫

かくあれと願ふ初潮満ちてきし  
青々と老ひし大木秋の潮  
冬瓜の笑ひ皺とも笑窪とも  
自然薯を結びし紐のとけやすし

消ゆるゆゑ次の待たるる秋の虹  
宵闇の中のどうどう巡りかな  
どびろくの味も体で覚えよと  
弥陀ヶ原美女平にも秋の風  
萩ゆれて己が影を振りはらひ  
御仏に囲まれてゐて火恋し  
木の実独楽銀河の渦も回りをる

# 寿

竹内悦子

寿いのちなが 雪の降る日の薄化粧  
年越の豆も食べずに逝きにけり  
枢まだ空つぽなりし寒牡丹  
凍蝶や昔むかしの着べ物べを着て  
きさらぎの阿弥陀如来のどぼとけ  
生きのびて泡盛なんぞ胃の中に  
般若心経唱う棗の実の青し  
破芭蕉この家に在る佛かな  
たましひを置いてけぼりに万年青の実  
天あれば地あり人あり白木槿

特別作品

蝗の眼潮引く海の湯浴みかな  
萩咲くや島に大雨注意報  
月の出の海星乾びてをりにけり  
また一人また一人来て銀杏の実  
花芒踊つてゐたる心電図  
目ン玉を触られてをる秋祭  
目の奥の光むらさき鴉高音  
眼帯に無数の穴や空也の忌  
くれなゐの玉虫くれなゐの蓬  
枯蓮の土に伏してや神宿る

# 槐安集

市場基巳

夏草のいきれは流しきれぬ雨  
山の雨ゆるめて咲ける葛の花  
泡消えしビールに繋ぎぬし思ひ  
酸っぱきを欲る行く夏の蛇を見て  
泪して亀は残暑にも敏感

水野恒彦

神々を畏れ末枯を急ぐなり  
さねがずら濡れて快樂の日もありき  
星飛ぶや肉体をもて我ありき  
木の葉髪真昼の音の流れゐて  
朱の円柱深まりゆけば冷まじき



石脇みはる

紺碧の空あり槐の実たわわ  
菩提子や十六双の地獄絵図  
仲秋や烏賊干して海白かりき  
神の旅篋筒に風を通しけり  
藁ぼつち日のくれ近き麓かな

竹内悦子

孔雀草紙のコップに水入れて  
空瓶にひげのメビウス赤のまま  
風船葛われ青空を一人じめ  
富有柿ピサの斜塔のごと盛られ  
梟やもう夢の中でしか逢はず

延 広 禎 一

雁やおんころ紺紙銀泥経  
梨囁むやつぎつぎ出づるオノマトペ  
どんぐりや石の波動と人の氣と  
逆髪を撫でをる狸々楓かな  
井の神のめくばせありし衣被

中 島 陽 華

ようそろと胴間声あり秋の海  
隼や赤ら柏に飯盛つて  
神妙や赤山禅院へちま加持  
満月の道灌山や火の用心  
白秋の七島八島黒耀石

栗 栖 恵 通 子

十六夜の上がり框の濡れてゐる  
飛車角を落としてゐたり夜這星  
秋志岐の島二句うらら地蔵の腹のほげとつと  
會良消えへて砲丸型の秋怒涛  
鱸綱の二重に冬の立ちにけり

加 藤 み き

年年の影太りたる白鴉  
田の色のつづき近江の湖があり  
山葡萄のアントシアンを舌の上  
日当りて大綿見えずなりしなり  
海坂をふはりふうはり齒朶胞子

大島翠木

冬瓜汁熱し大日如来かな  
その先は闇の海ゆく雁の棹  
どんぐり踏み肝心な事言へざりき  
桜紅葉散るへだたりの川辺かな  
梨の芯酸つばかりしと君に言ふ

雨村敏子

邯鄲の耳にのこりし眠りかな  
いくたびも杉谷通りけらつつき  
ひやひやと文鎮置きぬ夜の机  
蓮池の枯に入りたる虚空かな  
桃吹くやひと口メロンパン四角

黒田咲子

豊作や毛虫の糞を笑ひつつ  
西行へ小鳥の告げに来たるかな  
多羅葉の木と解るまでそぞろ寒  
松ぼくり念仏踊せしところ  
毒茸「ねえ」と見上ぐる顔ありけり



# 槐市集

秋岡朝子

星あかり歩み出したる菊人形  
めらめらと燃ゆる芋火や脳の減る  
目の前に来て舞ふ白き秋の蝶  
秋晴や柿の葉箆に洗ひあげ  
松手入命の綱がひかるなり

天野きく江

生けるものみんな菩薩や小鳥来る  
ここよりは紅葉山とや四十路かな  
月光の水飲みしあと家に入り  
ヴィオロンや月弓形に遠ざかる  
秋光やメトロノームに似し一日

安岡房子

撫の原発荷峠に暮早し  
親鸞の笠置かれあり破れ芭蕉  
昼の虫さくらの樹下にひとを待つ  
菩提子のきりぎり舞ひしドナウ河  
「さよなら」に揺るるコスモス大落暉

吉田順子

をりをりの日差しに通草割れにけり  
下り築はねる魚影に素足かな  
吹かれつつ泡立草のまぶしけり  
柚子をもぐ島に大きな入日かな  
遠山を雨濡しゆく杜鵑草



# 槐集

## 高橋将夫選

アポロンの金髪光る鴟の声 岡崎

近藤 喜子

一匹の秋刀魚で足りる夕餉の詩 岡崎

岩月優美子

秋の鮎光のクルスマとひつつ  
猿酒やマイナスイオン濃き辺り

こんもりと母胎の丸さ蜜柑山

落柿や大往生といふがあり

柿赤き おおよやしまぐに 大八洲 国山日和 枚方

中野 京子

土塊を解きし花野に解かれけり 安城

天野きく江

ユトリ口の白はどこまで薄原

草の絮言の葉掴みそこねけり

カレーの香秋の風鈴吹かれをる

小刻に動くファックス天の川

漆黒の櫃に月光さしてをり

鉦叩となりへ越してゆきにける

炎心や四方に枝はる槐の実

鶺鴒の番とびきし茶筌塚

海や窟に新酒祀りゐて

近藤きくえ

かりがねや心耳にとどむ南無のこゑ 東京

西村 純太

たましひを銀河に流すすてひじり

鴟啼くや巫女いたこの前に頭垂れ

茫茫と苦海を渡る鮫の影

秋霖や踏み絵の人の罪と罰

# 銀河往来 高橋将夫

◇「槐集」 観照

秋の鮎光のクルスまとひつつ 近藤 喜子  
子を孕んだ秋の鮎は出産し、川をくだる。その姿はきらきらと  
輝くクルスのようだという。生と死のドラマである。

草の絮言の葉掴みそこねけり 中野 京子  
あのとときふと口をついて出た言葉。そして、そのまま忘れ去つ  
た言葉。まるで、ただよう草の絮を掴めなかつたように。

鉦叩となりへ越してゆきにける 近藤きくえ  
隣の庭で鉦叩が鳴きだした。鉦叩が隣の庭へ引つ越していくと  
いう作者の遊び心がなんとも愉快。

障子洗ふきのうの鬱も洗ひけり 岩月優美子  
古い障子紙を洗い、はがして、新しい紙を貼る。張り替えた後  
の爽快さを思うと、昨日の鬱を洗い流す気持ちがよくわかる。

土塊を解きし花野に解かれけり 天野きく江  
花野で土くれをほぐしている。これだけでも一つの景。そこに、  
開放された自分がいるという重層性が魅力。

たましひを銀河に流すすてひじり 西村 純太  
そうすると、俗世を捨てた一遍やその門流の魂ははるか銀河の

かなたにあるわけだ。作者の精神の位相もそこにある。

宵闇に溶けてしまひし実紫 近藤 紀子  
まだ月の出ていない宵の内の深い闇。宵闇に紫式部の実はつき  
すぎなくらいだが、それだけに「溶けてしまひし」がびつたり  
くる。

縄跳びの小波となりし雁渡る 谷村 幸子  
縄跳びの大波小波。小波のときに渡る雁が見えたのだろう。小  
波のような雁の列が連想される。

火祭りの藁の燃えかす拾ふ秋 竹中 一花  
勇壮な火祭りの後だけに、藁の燃え滓を拾っている素朴な景に  
心を打たれる。本当は拾うと御利益があるからだそうだが。

木の葉舟月の光の重たかり 大山 里  
木の葉舟の軽さからみれば、皓々と輝く月の光は重たくさえ感  
じられるという。感性もさることながら、深みもある。

信楽の地玉子提げて月の暈 植木 戴子  
月の暈に地玉子ときて、そこに狸が加われば役者がさうろ。懐  
かしい里の景。

天狼や太平洋に咳ひとつ 本多 俊子  
夜空の大きな景から太平洋を経て、咳ひとつまで景を絞ってい  
く。太平洋に咳でもギャップが大きいのに、天狼まで行くから  
たいしたものだと思う

乾びたる刀豆布袋さまの腹 中田 禎子  
刀豆は乾びていても立派。それにしても、黄檗山で見た布袋さんのははちきれんばかりの立派な腹だった。めでたい。

瓦師の歩く大屋根 黍嵐 十川たかし  
瓦師ともなれば瓦を作るだけでなく、屋根に登って瓦の気持になつてみることも必要…かどうかは知らないが、ともかく登っていたのである。黍嵐が絶妙。

かいつぶり月のかけらとなりて消ゆ 万城希代子  
月光の中のかいつぶり。水にもぐつたかどうかして一瞬見えなくなったのだろうか、月のかけらとなりて消えたという感性が素晴らしい。

口切や火蓋切りたる翁面 前田美恵子  
何の火蓋を切ったのかは知らないが、相当な覚悟があつてのことだろう。新茶の口切茶事が配されているところが暗示的。

星の渦よく見えてをる尾花蛸 南 一雄  
産卵後の尾花蛸は食べてもうまくないらしい。でも、星の渦がよく見えているというから、なかなかのもの。

雲水に熟柿二つを喜捨したる 久保東海司  
身に入むや岩場にありし虚貝 松原 伸子  
トルソーの細身に後の更衣 富松 寛子  
風船蔓山の鼓動に応へをり 犬塚 芳子

足高く置いて休みぬ青みかん  
神ありて烏瓜の実まつかつか  
須弥山の後ろにまはる明の月  
まだぬくき冬瓜かかへ神の座へ

植松美根子  
近藤 公子  
安岡 房子  
奥村 邦子

